
列車の少年

東 孝太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

列車の少年

【Nコード】

N0519Y

【作者名】

東 孝太

【あらすじ】

とある田舎に住んでいる社会人の主人公は、出張先に行くための列車で、ある少年に出会う。

（前書き）

文章力ないですが、頑張って書いたので最後まで読んで下さると大変嬉しいです。

まだ残暑の残る夏から秋に変わりかけのある日、私は遠出の出張の為に急行列車に乗っていた。不思議な事に私の乗っている車両には私以外誰もいない。私はちょっとした優越感に浸りながら、退屈しのぎに流れてゆく窓の景色を見ていた。風が涼しい。

ふと、車両の後ろにあるドアが開き、別の車両から一人の少年が入ってきた。黒のＴシャツに短パンの少年は私を見るとにつこり笑い、「ここあいてますか？」と言った。

私は車両が貸切じゃなくなったので、少しがっかりしながらどうぞといった。しかし何故この少年は沢山席が空いているのに私のところに来たのだろう。

少年は私と向かい合うようにちよこんと椅子に座ると、私に話しかけてきた。

「お兄ちゃんはなんでこの電車に乗ってるの？」

私は突然少年が敬語ではなくなったことに少しムツときた。まあしかし見たところこの少年は7・8歳ぐらいでおそらく悪気はないのである。

「仕事だよ？どうして？」

私の答えに少年はふーんと返した。なんだこの少年は、自分で聞いたのに生返事をして。ちょっとしつけがなっていないんじゃないのかな。

私はそんな心の声を押し潰し、少年が私に質問したように、少年にも列車に乗っている理由を聞いた。

「僕はね別に何処かへ行く用事はないんだ。ただこの電車の最初の駅から最後の駅までずっと乗るの。でね、こうやっているんな人とお話するんだ」

少年は笑った。その笑顔は無邪気で、どこか癒されるものがあつた。私はこの笑顔によってさっきまでの少年に対する怒りの心はきれい

さっぱり無くなってしまった。

「もうどれくらい続けてるの？」

私の質問に少年はうーんと唸った。

「忘れちゃった。でもね、たくさん、たくさん、たくさん色んな人を見てきたんだよ？この電車に乗ってくれた色んな人を見てきて、沢山お話したんだ。中には僕に怒って話をしてくれない人もいるけど…。お兄ちゃんは怒らないからお話出来るね！」

私はさっきまで少年に怒ろうとしていたので、少年の言葉を聞いてどきりとした。

「でもね…この電車、今日で無くなっちゃうんだって…。だからお兄ちゃんが最後の話し相手なんだ」

確か駅長がそんなことを言っていたな、と私はふと思い出した。しかし最後だというのにあまりにも人が少なすぎる。

私は残念だね、といった。少年は肩を落として残念そうにしながらうなづき、黙った。

私と少年の間に、長く沈黙が続いた。ガタンガタンという電車の走る音と、時折聞こえる踏切の音だけが私の耳に入る。遠くで鳴いているセミの声もかすかに聞こえた。

私は鞆を棚から降ろし、中から飴をだした。私が子供の時からある飴で、いつも常備している物である。味はイチゴやブドウがあり、まだ封は開いていない。

「くれるの！？」

少年の顔がぱつと明るくなった。私はにつこり笑いながら、そうだよと言い、少年の小さな手に飴の袋を握らせた。

少年は輝かんばかりの笑顔で飴を開けて、小さな口にほおりこんだ。私は少年の幸せそうな顔を見て、とても幸せな気分になった。出張先で失敗したらどうしようという緊張をほぐすいい機会となった。

私はそのあと、少年と色々話をした。少年が今まであった不思議な人たち、優しい人たち、悲しかったことなど沢山話した。今

まで退屈だった

そんな中で、列車のアナウンスが鳴る。

―次は、大蔵町。大蔵町。

私の降りる駅だった。この少年と会ってから時間が早く進んだように思う。この少年に感謝しなければ。

「じゃあ僕は行くよ。ありがとうね君、楽しかったよ」

私が鞆を持って立ち上がると、少年は悲しそうな顔になった。しかしすぐに無邪気な笑顔を見せた。私も笑顔で手を振り、少年に背を向けた。

「僕の方こそありがとう。最後にお兄ちゃんみたいな人が乗ってくれて僕も嬉しかったよ！絶対恩返しするね」

私が振り返った時には、少年はもういなかった。

私はその後、出張先で大きな成功をしたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0519y/>

列車の少年

2011年11月11日04時20分発行